

＜英国棧橋調査の余録＞ スコットランドのエジンバラ

2015 調査

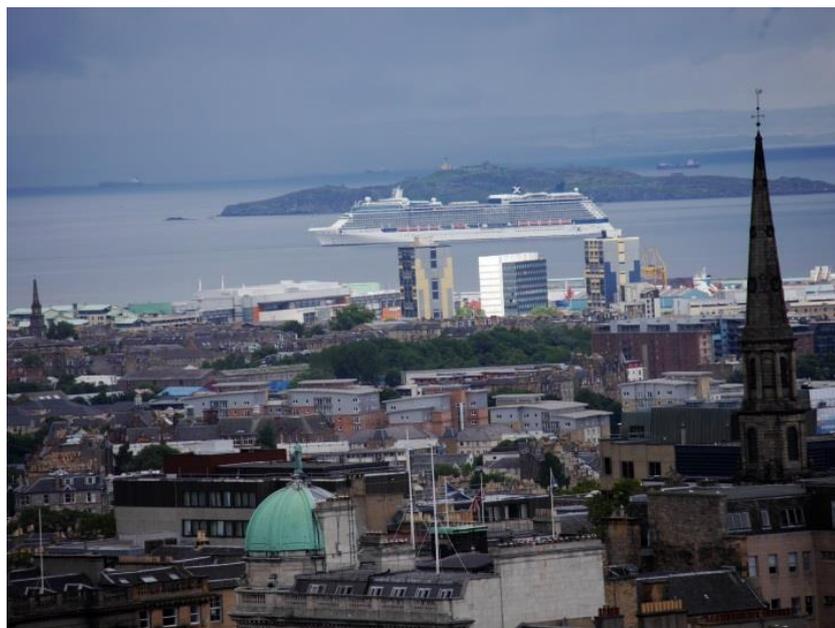
(執筆担当 布施谷 寛)

スコットランドといえば、今年「The Open」が開催されたセントアンドリュースを思い浮かべるゴルフ愛好家も多いでしょうが、今回 5 人の調査団がエジンバラを訪問したのは、その最終日に当たる予定だった日曜日でした。調査に没頭していた調査団は雨で一日順延されたことには気がつきませんでした。事前のホテルや月曜日午前中のヒースロー行フライトの確保には苦勞しました。(もちろん松山選手の活躍を見に行くなどという話は思いもよらないことでした。)

ゴルフ発祥の地で紳士の国といいながら、今回のワールドカップラグビーでの日本 vs スコットランド戦でのあからさまなティア 1 と 2 の間の階級差別的な日程には、いかにも腹が立ちます。ラグビーに限らずサッカーなどでも、イギリスは一国ではなく、イングランド・ウェールズ・スコットランド・アイルランドが別々にエントリーする歴史的な特権を維持する一方で、否決されましたが独立投票に象徴されるスコットの UK に対する複雑な思いが入り混じっているのも現実で、ユーラシア大陸で各国が栄枯盛衰を繰り返す中で、国内でも歴然と階級社会を維持している英国、さすがに奥行きが深く日本人には伺いしれない側面があるようです。

今回は工業都市から発展しているグラスゴーと古都であり金融の一中心でもあるエジンバラを訪問しました。

エジンバラは古都としての観光の魅力も強力であり、エジンバラ城は 16 ポンド (約 3,000 円) の入場料にも関わらず非常に多くの観光客で混雑していました。エジンバラ城の前の広場 (Esplanade) で行われる軍楽隊の祭典 (Military Tattoo) など観光の目玉も多く、



エジンバラ城上からも複数の大型のクルーズ船が停泊しているのを見ることができました (写真 16、沖係りの大型クルーズ船、この他にも岸壁に係船中のクルーズ船が複数あり)。



また、エジンバラ城は岩山の上に造られており、市内の方々から見上げることができるランドマークともなっています。要塞としての荒々しさが顕著であり、スコットランドの長い苦難の戦いの歴史を常日頃から思い起こさせる面もあるに違いありません。この他にも、カールトン・ヒル、ホリールード・パークなど身近に登れる丘陵があり、今でも英国王室の宿泊所となる優雅なホリールード・ハウス（宮殿）や街並みの眺めは素晴らしいものです。（写真 17,18 古土井団長がフライトの混雑期を避けて4人の団員より2日ほど滞在を延ばして単独行した際に撮影）

スコットランドは人口・面積とも北海道と同じくらいで、緯度では遙か北にあるが、冬は氷点下になることも少なく、一方、夏は20度を超えることが珍しい、相対的におとなしい気候ということになります。総雨量が少ない割には、**TheOpen** の中継でわかる様に天候が急変しざっと冷たい雨が降る日が多いようです。傘は必需品です。

ホリールードハウスとエジンバラ城とを長い坂道で繋ぐロイヤルマイルはオールドタウンの中心であり、城寄りには歩行者天国となっており、観光客も多く道の両側にお土産屋や飲食店がずらりと並んでいます。バグパイプの演奏や多種の大道芸も多く、その一つが浮遊系スタチュー、物理的な種明かしは簡単ですが、一度組み立てると簡単には撤収・再構ができないので、一日の中でも度々降雨に見舞われるスコットランドでは、観光客が目もくれずに雨宿りのために足早に歩き去っても、ひたすら傘をさしてじっと頑張ることになる、しかないようでした。



←←←←
強い陽射しが照りつけても
→→→→
雨が降り出しても



トランドといえばスコッチウイスキー、かつてはその代名詞だったジョニーウォーカーやシバースリーガル、オールドパー、カティールサークなどは複数のモルトウイスキーとグリーンウイスキー（正確なアナロジーではないが、日本でいうと雑穀を使用し連続蒸留した焼酎甲類のイメージ）をブレンドし、安定した味で大量に供給されているもの、近年日本でも人気の出てきたシングルモルトは大麦芽だけを原料にしたモルトウイスキーの同一蒸留所由来だけを混合したもので、原料の大麦芽、水、ポットスチルによる蒸留方式やモルトを乾燥させる燃料炭のピート、熟成樽（バーボン樽またはシェリー樽）などにより、強い個性が魅力となっている。同じ蒸留所であっても樽ごとの風味のばらつきが大きいので、一つの樽からだけ詰めるとシングルカスクとなり、さらに個性的である。また、地域別に大まかな個性のグループがあり、おとなしくソフトなローランド（オーヘントゥシャンなど）、蒸留所数が多く、適度なスモーキー・潮味があるハイランド（オーバン、グリーンモーレッジ、ヴィクトリア女王の愛したロイヤル・ロッドホナガーなど）、エレガントで花の香りのあるスペイサイド（マッカラン、グレンリベットなど）、ピートの個性が強いアイランズ（なかでもヨードの香りが特徴的なアイラ島のアードベック、ラガブルーリン、ボウモア、ラフロイグなど）・・・、マニアックに楽しむことができます。ビンテージ・シングルカスクなど特別なボトルは別ですが、日本でも手に入れやすくなっており、個人的によく利用しているビッグカメラは品揃えもどんどん豊富になっています。スコットランドのお土産酒屋やヒースロウ空港の免税ショップより安いのではないかと、という感じもあります。なお、チャールズ皇太子御用達（Royal Warrant of Appointment to HRH The Prince of Wales）のラフロイグをはじめ、ボウモア、グレンギリー等の著名なブランドの一部がサントリー傘下の蒸留所となっているようで、朝ドラで「マッサン」（彼の修行したキャンベルタウンはかつて30以上の蒸留所があったが、現在は2箇所のみとのこと）の話を知ったあとでは、一寸した感慨があります。今回、エジンバラのホテルのバーで味わったハイランドパークは同行の皆様の評判も良かったのですが、名は体を表さず、アイランズ（バイキングの島であったオークニー島）の蒸留所です。ちょっとだけは楽しめましたが、スコットランドまで行って一カ所の蒸留所も訪れることができなかつたのは、大いなる心残りです。

<完>